

Centimetres

KODAK Color Control Patches

© The Tiffen Company, 2000

Kodak
LICENSED PRODUCT

Black

3/Color

White

Magenta

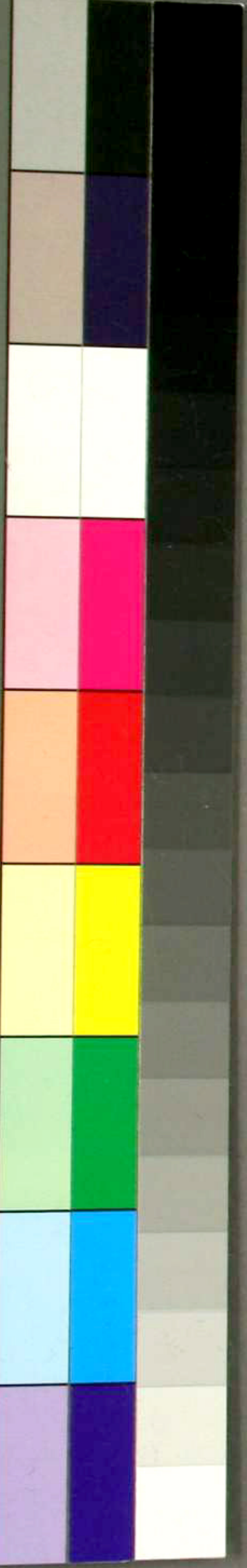
Red

Yellow

Green

Cyan

Blue



陰本合邦過
六

遠13
872
6



0

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

1

2

3

4

5

6

7

8

9

20

1

2

3

門へ通
號 872
卷 6

皇朝圖書集成

繪本合邦通卷之六

目録

高橋元左衛門報世の志願之生活

日瑞く家より花の家

高橋元左衛門 虚病を構へて鎌倉退く話

高橋元左衛門 教経を想へて高橋と手付せんと仕ゆ

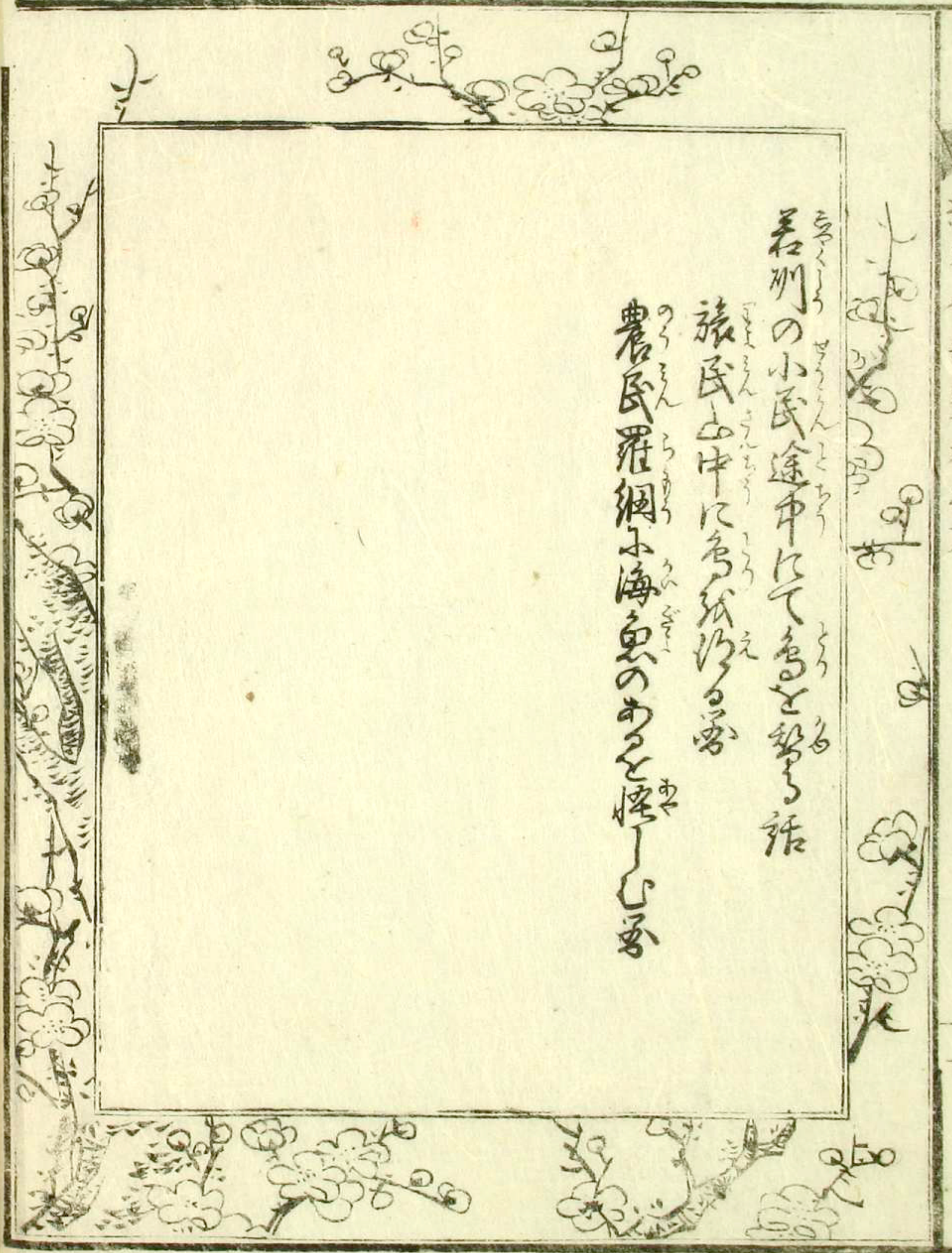
高橋元左衛門 高橋國を立退く話

簡兒大長寺城中と親小話

風彦小大膳厄屋を取小話

明治三十年
十一月十日
購本

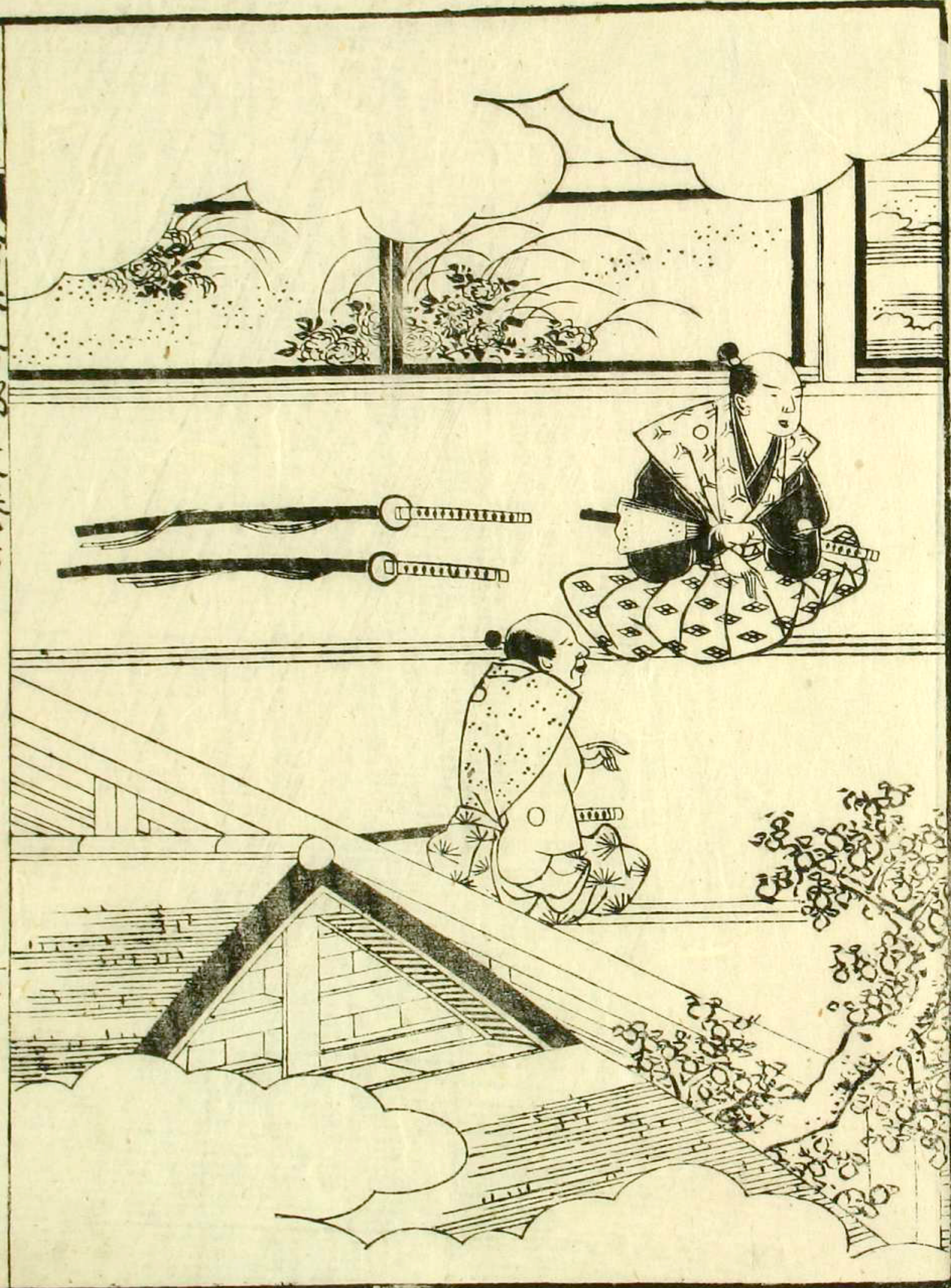
若明の小民途中にて鳥と繋る話
旅民山中に鳥が泣く事
農民雁網小海魚の事を怪しむ事



繪本合邦辻巻之六

鳥が泣く事

伍員某の兵と繋る屍に難王復讐身而向して此の是は飾情と稱
て強くおよぶ天倫の自然に止るる事
佐々木の子清を誘ふが様子の形骸と云ふ異に奈徒野田奈八と稱す人
長も人をかく潜匿して其実を探らむに小枝大膳危夜先以田獵
の加宿は分よ泣く水乃の奉初有にけり足清を馬の法く走法しを
りしに地つゝ其暴逆と止るとは情の情りも指が大長人赴くおとさ
事によそて館に味あ温と以中のさるるをさるるに討ち初静
と激細よするる大なる怒怒又足見の雙の世と隔ても必報はつと結大
大膳危夜はさるるの御前にて我なりも君の誰とぞ御方さるる事



高指
 他方
 仍之
 取之
 圖



抑もは方々ありて居るものほりも討めんよ能ては彼令念徳骨よ
入懐恨れに恥とも堪忍なごたもあつ真の事受彼方の暴悪とて
後に幸氏と致し不満しとも暴戻とよんし一の以時足清衆
つれも事と何れせば身も安穩さうもたよ上下の礼と重く理と矯
て強硬よ事とほりよのこほく真思と名ひふをばや却く仇敵の受
とよし教言あるのこほりよのけり奉初もまぐ甘くと心と慢せま
刀のものと強討よ一の事此法とやいんれたとやいんか之家に行うとも
仇敵の衆さうと慢にまひの暴逆の初信を致と以論とがし一の
恨とよいんの難又云の理と論とまは天下の衆人なり者人を周武王真
君と謀しと福支と稱一の天昭を友もめ初仁と傷美と賊の人のまじり
匹夫とつづ一匹夫のよよ見と討きて其仇と報らるも夫支の志にあ

らば且期清を即の未弱冠なりはよと徳をた大切の身とて馬の
勇と違ふして虎兇の免は陳だしは即今の仇と報らるも初信とど
下るうまはと知るものおに死にたの美人の名思と更甘しは
たご一命さごと必報の仇と持く然るは天理人情共の安せざる而
跡は若家と縁遇しよも初義とをよめと名ひのふ故さうあるに由り
の大名と虧が時よ君の腹定しよもよのさう思ふは忠存あ今
事法は只私の神堂と称にあり彼令念已又宵の粒と更ももをあう人
まの虧はしと奮然として強敵の志と定まらうはと初と稱し
てあつの身とて然るに極に親友とあつるも初信よて夜接し初老
の体よゆりあつるはしよ一紙のれ書と出して云は後復の疾と更
遠に回復の四つはとよ思縁と貴は恐びは疎と解し致仕心寛

二福と養子夜も怨は清求し六人の教誨云れ去の返りて人の心は清
 川事ハ之れ忠勇の士なりて堂下へ縁と費入事と畏先は嫁を成
 穉して子孫と賜ふるの志と取今又此の月福よりて取又縁と穉
 する年経く素志はむとむるはむと家士と謂つて梁が年未
 不に血氣もあたるは醫業と加らるにわろく治せざるの理ありん
 や心寛保養さるる有世せよと親よ命じの先月中きておと命
 の紙と傳へ致仕の預書とを返しりり

高橋忠福と攝子強念と退く話

初て高橋忠福の教書と紙と傳へてわろく治せざるの理ありん
 加養さるるの旨伝ふるは雅有君の御意深く感懐おしと命
 紙の志と定し高橋も縁と成さるにあらばと重て去と志とに

も怒余怒信始にまげと清條ありんは高橋忠福も取て是を恩の
 厚と感し將に事と知んと思ふ心もよもあはれども熟名ひふに君
 我弱弱の初一時の初能に志と知りあはれ時を待たせしと信の紙と傳へ
 高橋忠福と傳へし切つと今のごとく縁重なりは信を親の仁恵り
 在の真恩と云ふ背らどとせは縁重なりは信を親の仁恵り
 とありひまに身の細り抱て事と知引せば後進も志と是の初あ
 りしは上の先南の礼節と取て只當返去の志と志を終恩と知
 るる不法のものも其加取くも其の清意も編致返せしと云ふより
 外御はしと志と定めまき取書と恐りて其退去と取ひて六人の教
 誨とあはれ思ひの志と初に心室して縁と成さる志と去りたり大
 再恩懐怨の命と下けし其志は甘く其志は堅固と如る回復の



敏徳云
 高橋と
 討入
 見と
 図

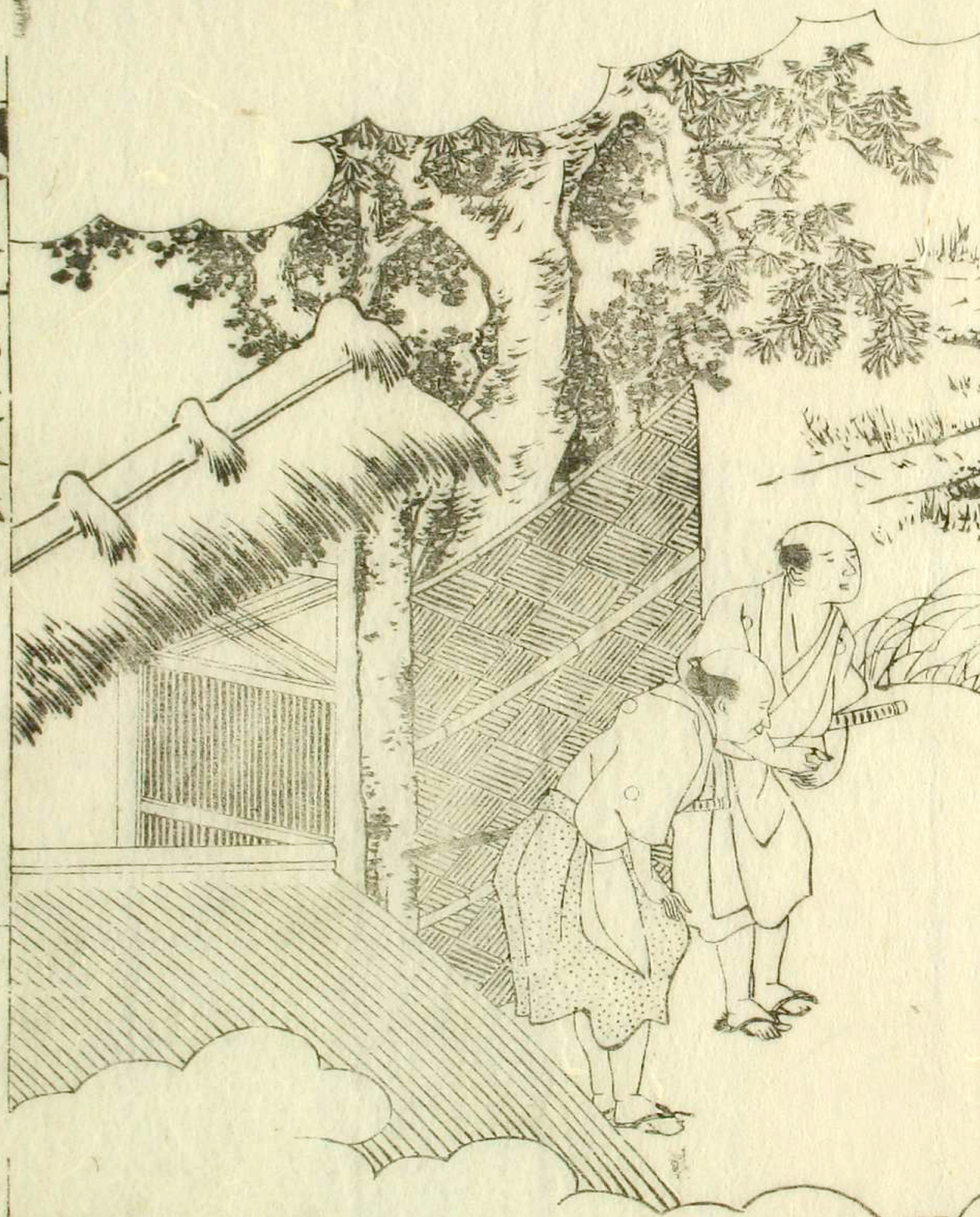


駿うゝにわかづい具州の者初もあるがては十日よも及ひて再之法
て色をと消事無と寝あつる仕方なりと右様の御氣色なりしが再び思魚
と巴りしひ家も指が心事と試るゆ事又し只武変勇敵の幸家城
捕一のこにわづら頗又まゝも傍々元居の丈に通せり給ふぬ田代殿
前にわづら死を智味味のなれは及ふ事甚敷く及り若家希るはと夫
が及び源と更くとゆふ細あつる又別よと思わが更う又一人又若くは秘
活の魚族と更うう其程けとと遠よ是れのか令今令ともトヨロ
南して其事もむをさつてりりりる愛に津波の決ま殺十人其年のあへり
あり徳念と初の交代として高ふせし六割のまもも書院にて一洗淨目
又卒て後志軍のもの二人務めまはは以謀中及び國內靜溢の決
とむ次は御家門を依津國の初靜と通ふと上よ及び中よ大長寺の御二

男入膳危及は故敷進にて殺く農氏と極一の入候よりあき筋候
の家臣も指清を忠門が愛死も愛へ大膳危及は及りたされいにより
今館中に押さるるをい浪衆の始末よむまも何ひ知りて細細し序使
にましむるに故敷公坐一鉢のひて後を羽の旗も大養なりと何事も違
及休息と許さるる其及よへつせりひて福に思て通ありらるる家臣が
色去と情の切らるとまふふ今門大膳危及指末とすつて尋嘆と極
たり来る不ば定他な忠門其大佐と極なり其の難と執るの志と後及
りても大膳危及危候とすゝ歎くあかぬ門の連枝とすは後世の志と取
よむたがく秩初は死と家と若居の義と絶其後病分の初とまさんとま
ゆる下し染る平素の前様とひくたつたるんもはむたもあへり若家推察
のをさるるわかづい御門のものとは壁と取入と知く胸の出しとしまさるる

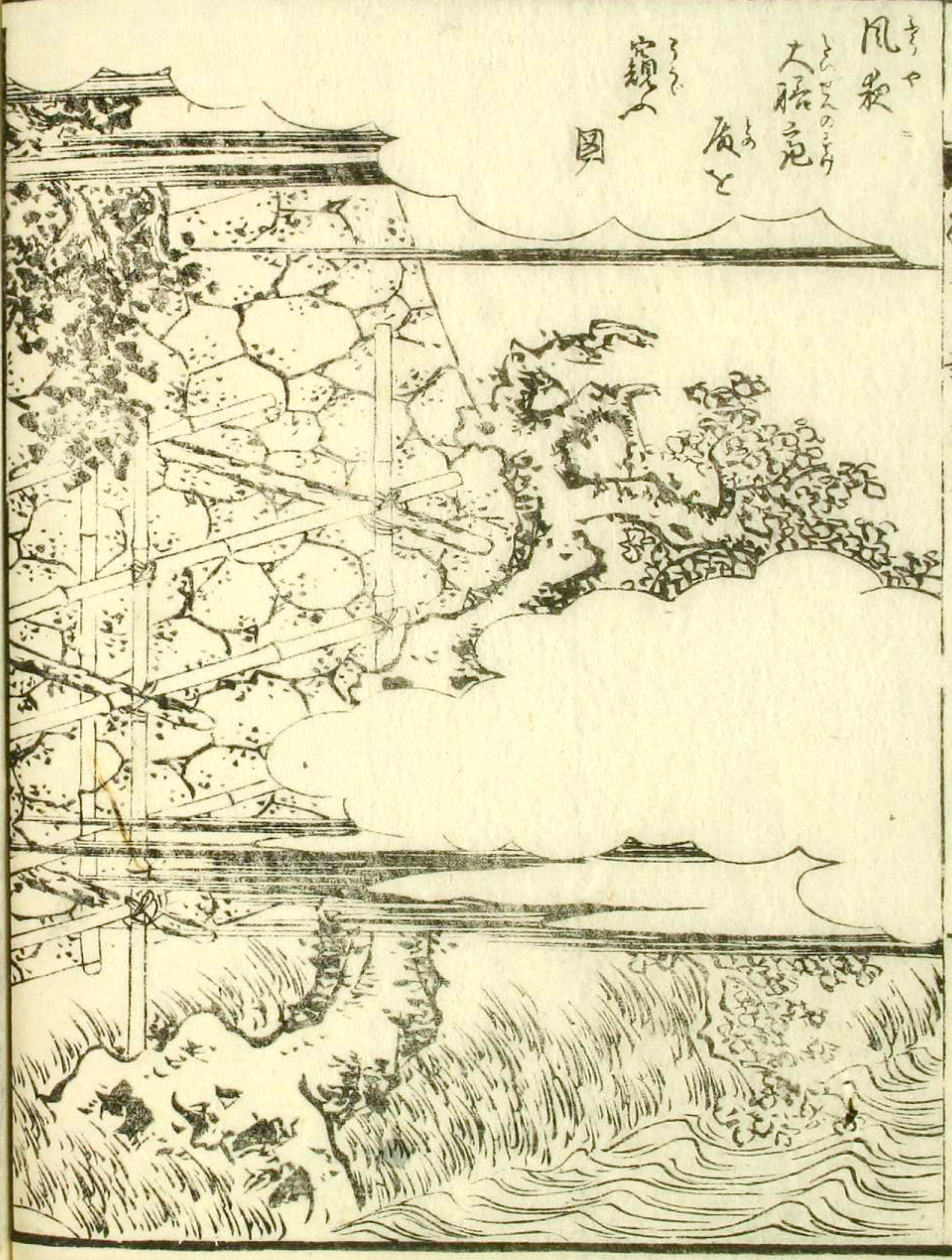
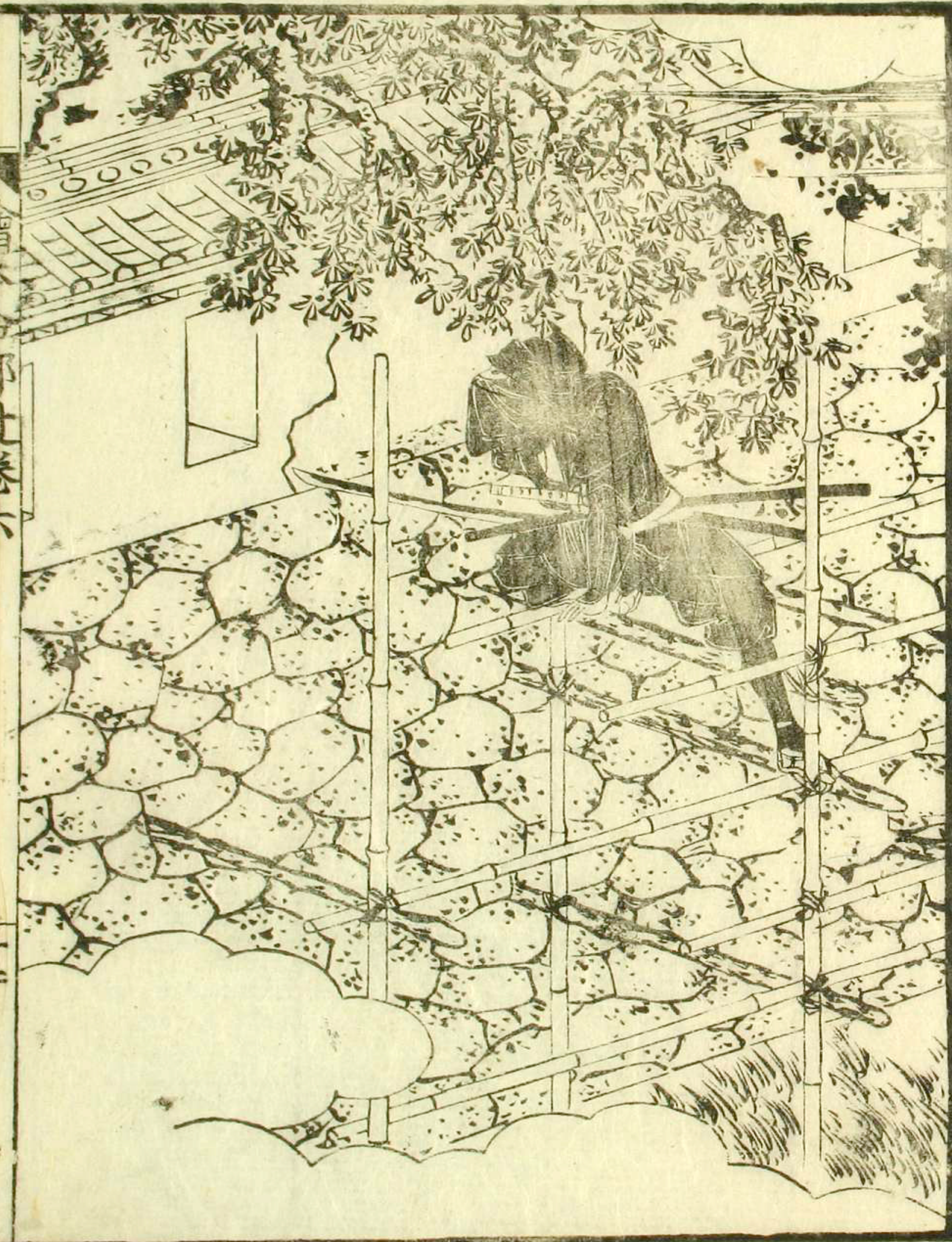
人暗る今館中に終居る一令城ゆ此の固あるが正し（中略）然今後又地よ出る
 仍ありとも教中の庵徒前後と例ハ他た東の板山を海の南をわつとも
 大暗危と討人奉るうたのそいあひんやと世命と又又奉るまをば
 まと知るまを死せぬ敗とまをとまを子牙の職とそんしをるま
 の決心と掩人へ人よ毛として初音懲息と取國と活るの命を背るまを
 他方ろが初音と探付宜にろくおよく勝とれんともをまを
 奉と紀ろろへの忠初と知るまを真致と洋るまをの教念もあま
 辨よへ奉來れたの事あり人討あつ大長ろろてろろもあろろとけし
 政めぬ敏經も決心あ端よまをひてまをろろろろろ一日付長十餘軍と
 一後園と道むろろの遠よる橋が身む入るまを中後有るまを後付
 の小姓まよとんとる橋よ若天做りまをへせのまよとてまよとへまを橋

他た東の人は終るまをまをるまをるまをるまをるまをるまをるまをる
 定有と探るろろろの所入るまをろろろろろと高ませろろろ早付入と
 里ての知るまをまをまをろろろ遠に礼服と齊て出平書度よ清がま
 中ろろろろろとろろろ平依るまをまをるまを入瀬持の役もけろろろ
 初中長後尾終の体美平沙る免トるまをと母入るまをまをまを
 仰る其体と熟視のひいろは他た東の女帝初あつて初社心よほせまを
 輝く好色くまを有再とれまをとせろろろまをまをるまをるまを
 御娘輝放芳の政体まをまをまをまをまをまをまをまをまを
 初位の初とつろろと懸休のひて其封初と何ひろろまをまを格致と上御
 の如く官致よあわて別よをまをろろろも長が初音音にまをまを
 と攻るままま切ろろ初音庸醫の知るまよあろろ又果石の乃まをま



高橋
 圖式
 五退
 圖





凡そ
大橋
石垣
石垣
石垣
石垣

繪本台辛五卷六

上

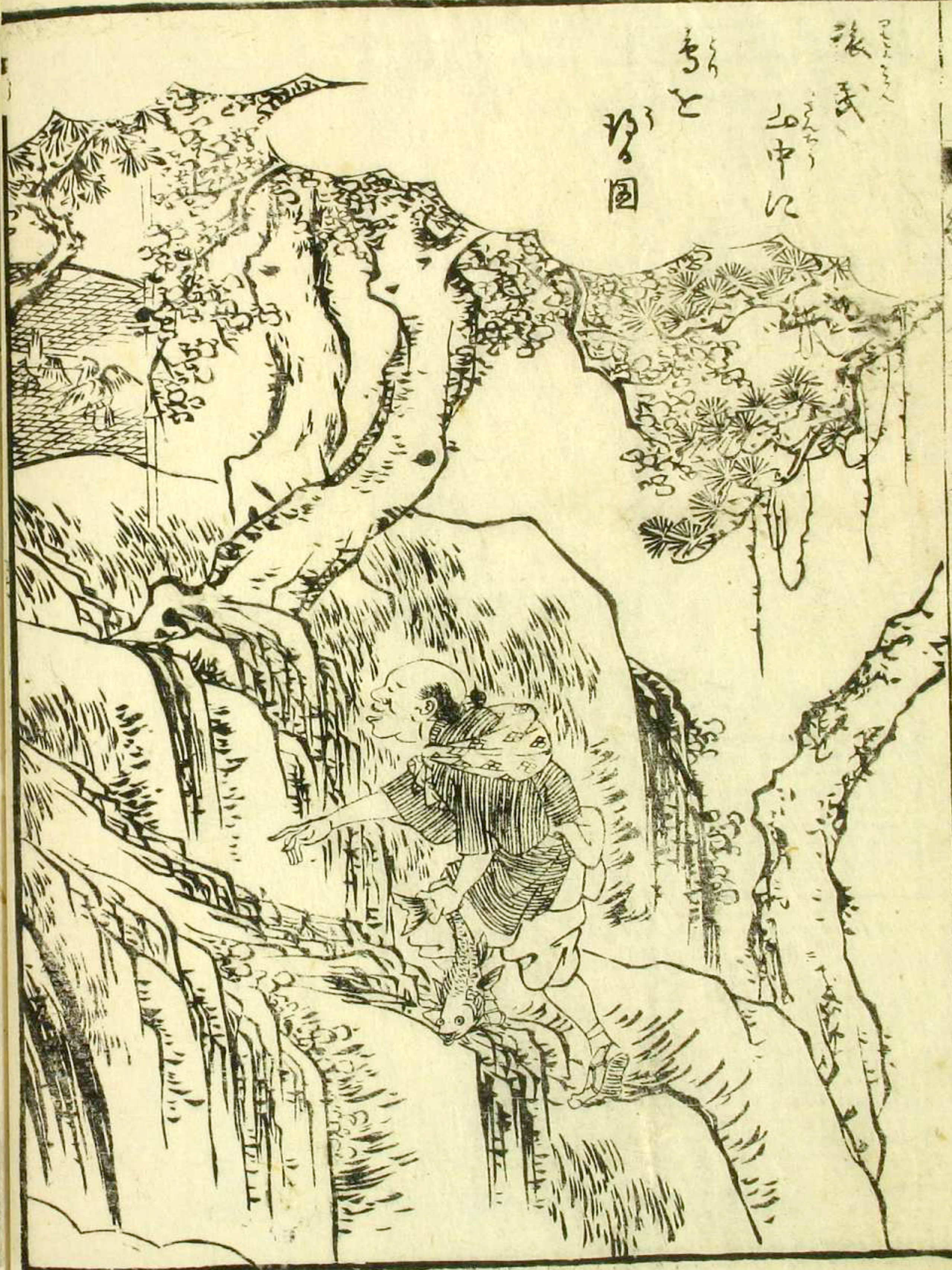
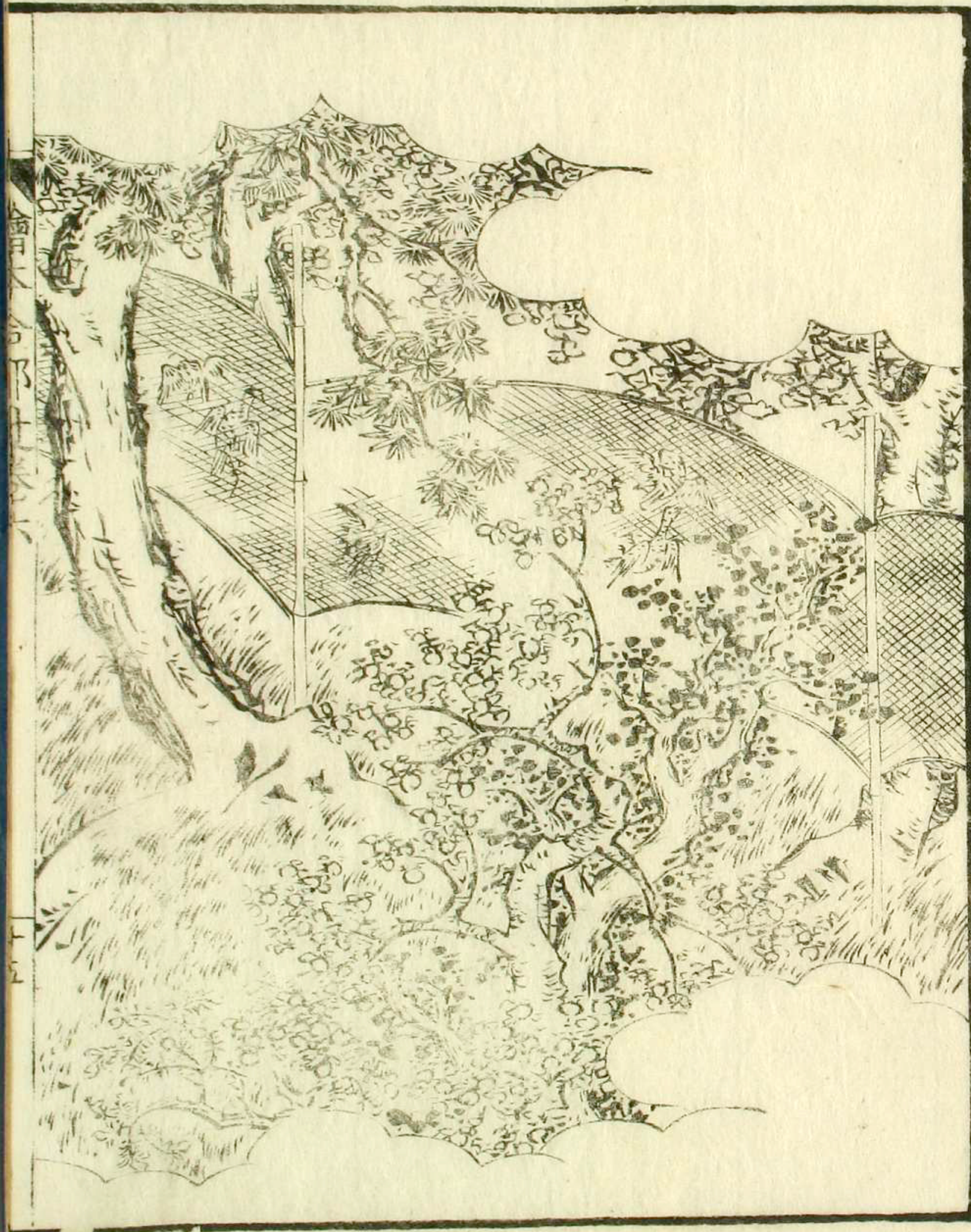
初ても指張老連の孫金殿内と云ふに...
 魚と名を容顔と変て法園通歴の修り共の作よ...
 あつ御河と其流よたとも...
 國令はよ...
 暴逆の...
 中に...
 比...
 成と論...
 対...

及んで...
 て...
 も...
 布置の...
 兼...
 と...
 全...
 の...
 る...
 又...
 竹木と...

方と係して拵歩中も歩み互に何等の為ぞ知らぬ地よと數十
 の草繩と引渡し其の先とを切たりはる御斗有んらんも対以佩
 刀と扱へ繩と切れよと告ぐ一忽れも數千の鳴子をよ鳴初くと相
 闘は株中敵は物騒しく忽ち火光而も起り枝多の人喜は方へ此
 なる取柄は極名の極名人は致さるるや響くもく擗しうし一本をこけ
 する事ありとて身と躍りて城外へ進出せ町中彼方より一村あり
 來に此處に居る人の人思と捨縁と稱して陣多の辛苦と傳へも其つ
 夫と裁きざるの世は又猪鹿と二名刀振るるや致さるる枝中に籠居の身
 とするのひて志と運だる時とて刃刺すの術とる人といふ今
 又此の事致さるるを志と運よとて武里に控ふるこの致すると其志を
 體は徹しよと嘯てさるしうしう忽ち法として又と作れ志者さるる

初あつた波の波とをく後の切と斗人若終身成まよく人波大勢と
 引更てい切とをば切死せ今一刀の下に死生と表示よと淋ふ小形を
 一刀と志向よ彼ら若る大石と丁と撃ば不測するはげ石も又たさ
 あ波とるる勢負よはたけく志守うさるるを知りて知事小後若期一
 後後信りて大長ち城内とて是後城若固令はよさる熟思をゆくと
 此は又大落危表の落指許との節も中とくは城中のち禦も堅固と
 是は遠に事なれど一運とて又よはく時とわよ志とて是より又法固
 遍歴の候り必しと身と度りし水漬五歳の間と仇細して大長ちの初陣と
 細ひぬしとんと定め先敵若とどろてをに固は距置六人衆の能お成
 又果の山野は宿して只管若にせ一膽と膏の志とを初しとる

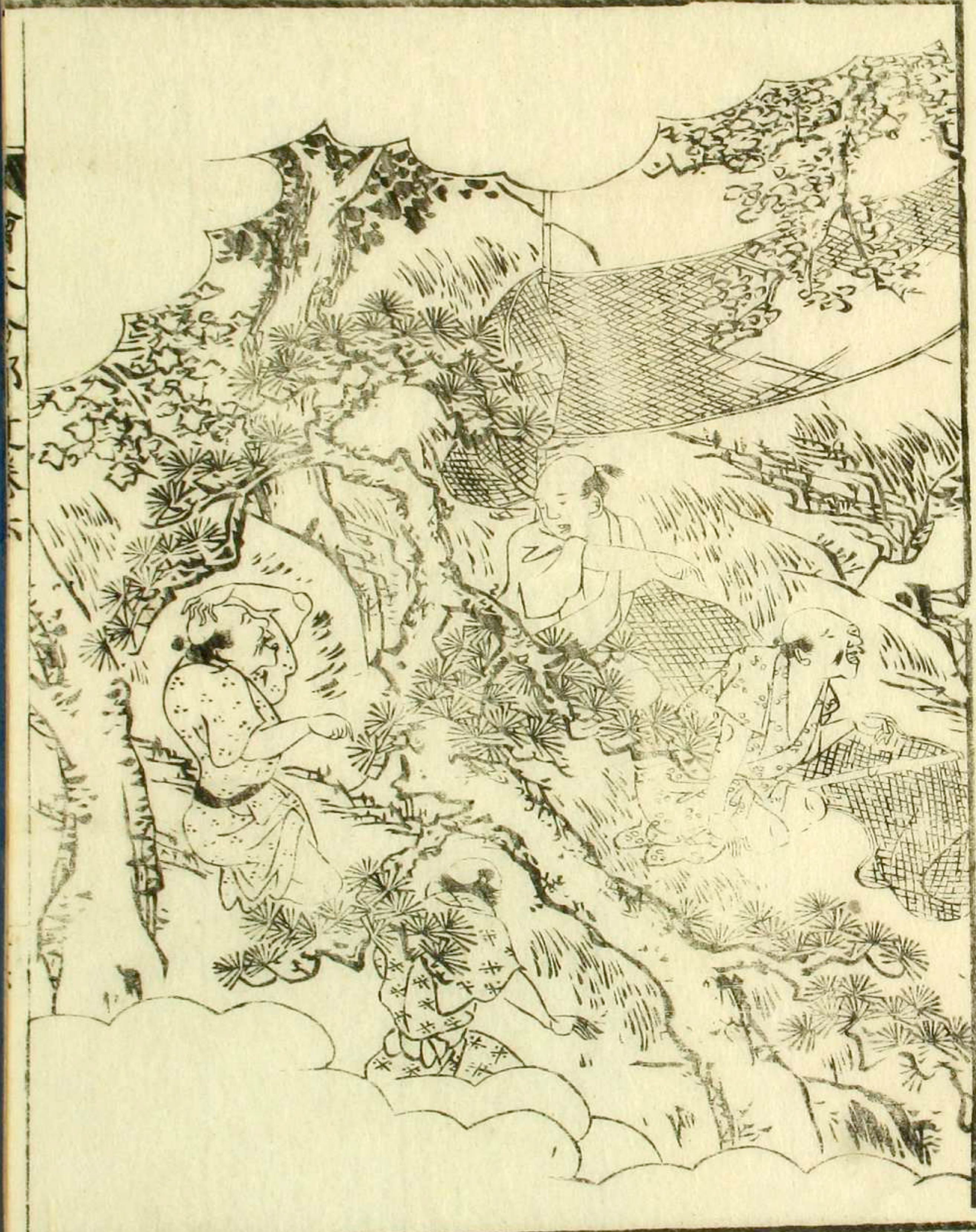
若別乃小民金中よてもと易る語



張武
山中に
引と
形圓

繪本合編 卷六

十四



終ノ合手ニ至ル

と目又後ぐ身と号してと一人の志母とて一日安楽よ色以事と
 けど若び羅とて一日の獲もの母とて一日の救日の母と甘菜と依せ
 んものとも恨く思ひ指さるるもく人居たり一が息をひきるとはひく
 くさあるものうらとるも山の中にお捨くちるものなまは後まき
 たる物よは人もうて来たる事とて驚く事と依く母よ甘菜と依
 後来遠にあり人時其候と依ひく死と謝するべからずの盗賊のふり
 日とてび人も審とてとて法をもとてとて擔持する奮又納るま人と
 せし再之ひるるお志なる母のふりおおのふりせとて是後よは初ては後
 の候とてふり盗賊よと夫らとて後の院よはもあは後乃候と依く
 と身と推しとあことんまこと日用のふるまこととてやうやく母の
 せよせんとい金中にく突る小紐一ツあると破羅の中に投入の管
 にとりて早うくとぬる物と羅との農民等毎のごく獲物とね
 羅と徹んとあうるに毎よ夜とてとて一羽も羅にや人介と物
 ある秋状るまはまあて終るるに少き鯉の細は羅くあはる人
 獲はひの捕あうて獲かると時とて十羽の小鳥なりとも羅がるは
 獲るよ今日よとてとる一羽もるく利水中に候鳥の羅くは事よあ
 捕く糸忽よも指せば忽るたて先村長へ告ぐ其後志も南もよ
 一人死めて物と告ぐは村長と首として固持する一村の老幼あは
 事と思ひて追て来りつるに少くはをりて小紐羅は羅てありは
 其よ驚え来候非を智の野合の其故と依るものなまは後まき
 の前表るると畏れ取捨ぐや又依るまはとてはにまはりて
 事得るものなまは後村長及び本年ぬくはあは人思ふとて

と目又後ぐ身と号してと一人の志母とて一日安楽よ色以事と
 けど若び羅とて一日の獲もの母とて一日の救日の母と甘菜と依せ
 んものとも恨く思ひ指さるるもく人居たり一が息をひきるとはひく
 くさあるものうらとるも山の中にお捨くちるものなまは後まき
 たる物よは人もうて来たる事とて驚く事と依く母よ甘菜と依
 後来遠にあり人時其候と依ひく死と謝するべからずの盗賊のふり
 日とてび人も審とてとて法をもとてとて擔持する奮又納るま人と
 せし再之ひるるお志なる母のふりおおのふりせとて是後よは初ては後
 の候とてふり盗賊よと夫らとて後の院よはもあは後乃候と依く
 と身と推しとあことんまこと日用のふるまこととてやうやく母の
 せよせんとい金中にく突る小紐一ツあると破羅の中に投入の管
 にとりて早うくとぬる物と羅との農民等毎のごく獲物とね
 羅と徹んとあうるに毎よ夜とてとて一羽も羅にや人介と物
 ある秋状るまはまあて終るるに少き鯉の細は羅くあはる人
 獲はひの捕あうて獲かると時とて十羽の小鳥なりとも羅がるは
 獲るよ今日よとてとる一羽もるく利水中に候鳥の羅くは事よあ
 捕く糸忽よも指せば忽るたて先村長へ告ぐ其後志も南もよ
 一人死めて物と告ぐは村長と首として固持する一村の老幼あは
 事と思ひて追て来りつるに少くはをりて小紐羅は羅てありは
 其よ驚え来候非を智の野合の其故と依るものなまは後まき
 の前表るると畏れ取捨ぐや又依るまはとてはにまはりて
 事得るものなまは後村長及び本年ぬくはあは人思ふとて

して今に發ひけきい山の水の小流をいあきとも終り又とらんは若又勝
 の敷地而よりあましくけ前にあたるるがけの傷にあやしくは鯉首より
 尾もあましくいさう傷あはしたとまじびあつ山中の自れとせや
 及し是ふく林のあおよて人かの測知るるをよあは麻糸の扱とよ
 してあふと史の法くまじの難るるまじあはけあは網と建く一村の
 ち渡神とまふ糸といふまじとあはえ来長味の村人あまじあらの思とあ
 く皆むとほはゆ又評法と定てそとたる網と管彼鯉と幼清く
 彩又山のゆ神と称則鯉のあまじとあはけとあはけとあはけとあはけと
 するともふ

僧本合部 卷之六

